



日本語における外来語アクセントとその変化

竹村, 亜紀子

(Citation)

海港都市研究, 3:143-154

(Issue Date)

2008-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81000037>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000037>



日本語における外来語アクセントとその変化

竹村 亜紀子

(TAKEMURA Akiko)

I 日本語の外来語の受け入れ方——言語学的視点から

外来語は他の言語から借りてきた言葉を指す。外来語はあらゆる言語において観察され、その社会的な受け入れ方は各言語によって異なる。言語学的にみると外来語は取り込み先の言語を研究する上で面白い題材となる。それはある言語において、これまで聞いたこともないような音の羅列が入ってきたとき、取り込み先の言語がどのようにその音の羅列を取り込むのかということを見ると、その言語の本来の姿を観察することができるからである。この報告では日本語の外来語の取り込み方を「音」の視点からみていく。そのためにはまず日本語のアクセントを知ることが鍵となる。第I章ではアクセントについて理解し、日本語のアクセントについて概観する。第II章では日本語における外来語アクセントの変化について、その変化の動機付けを調査とともに考察する。第III章では本報告のまとめを示す。

1 アクセントの機能とは？

普段「アクセント」というとどういう場面で使うだろうか。例えば「この料理は香草がアクセントになっていて美味しい」という具合に強調する点や際立つ点として使われる。言語学でいうアクセントも同様に際立つ点のことを言う。それではなぜアクセントが必要で、どんな機能があるのだろうか。アクセントには語や句に「まとまり」を出す機能と同時に弁別機能がある。弁別機能とは同じ一つの語のどこかにアクセント付けることにより、表記の上では同じであっても音の高さの置かれる位置によって区別をしようというものである。その例を(1)に示す¹。

- (1) a. **a.me** 雨 ‘rain’
 b. **a.me** 飴 ‘candy’

「雨」と「飴」はかな文字表記の上では同じであるが、アクセントが置かれる位置によって語の意味を区別している。これを弁別機能という。またアクセントがないと文の中のど

1 日本語のゴシックに下線を付した部分、英語のボールド部分はアクセントが置かれることを示す。

こで単語を区切るのかわからないことになり、意味が分からなくなってしまう。このためアクセントがあることにより語および句のまとまりを表すことができるのである。

2 日本語の外来語の受け入れ方

音の側面から見た日本語の特徴は、語彙にアクセントを持たない「平板式アクセント型」があることである。このアクセント型は一度上がったピッチが一度も落ちることなく平坦に発音されるものをいう。(2) は平板式アクセント型の例を示している。

- (2) a. アメリカ (a.me.ri.ka) ‘America’
 b. ひろしま (hi.ro.shi.ma) ‘Hiroshima’

このようにピッチが落ちず平坦に発音されるものは日本語を母語としない人には単調に聞こえ、その習得も難しいとされる。一方、アクセントがあるものを起伏式アクセント型と呼ぶ。

平板式アクセント型が日本語の中で特徴的であるを書いたが、どの程度日本語の中で観察されるのだろうか。表1 は3 モーラ²語の語彙層別、起伏式アクセントと平板式アクセントの割合を示している。

語種 \ アクセント型	起伏式	平板式
和語 (2,220)	29% (いのち)	71% (さくら)
漢語 (4,939)	49% (普段、看護)	51% (不断、漢語)
外来語 (778)	93% (ケーキ、ミルク)	7% (ポール、ピアノ)

表1 標準語3モーラ名詞(7,937語)の語種別アクセント型の生起頻度 [窪園 2006]

表1 からわかるのは、外来語は93%が起伏式であることである。一方、和語に目を向けてみると71%が平板式のアクセント型を好むことがわかる。漢語は起伏式、平板式両者とも半分程度の割合で現れることがわかる。表1 より外来語は際立って起伏式のアクセント型をもつことがわかる。

音の側面から英語と日本語との違いをみるために、ここで人間の言語の種類についてみてみよう。[Pike 1948] や [Lehiste 1970] は、人間の言語を以下のように分類した。((3) 参照)

2 モーラは日本語で言うとはば一文字に相当する。しかしながら、「きゃ、きゅ、きょ」のような拗音はかな文字の上では二文字であるが音として「1モーラ」である。

- (3) ①声調言語 (tone language): 中国語、ベトナム語、タイ語など
 ②語ピッチ言語 (word-pitch language)
 a. 高さアクセント (pitch accent): 日本語
 b. 強さアクセント (stress accent): 英語
 ③イントネーション言語 (intonation language): 英語

(3) より日本語は高さアクセント、英語は強さアクセントに分類されることがわかる。それでは強さアクセントの英語由来の外来語が高さアクセントの日本語に入ってきたときにはどのようにそのアクセントを実現するのだろうか。[柴田 1994] によると、外来語の約 70% が原語である英語のアクセントの位置と同じところに日本語に取り込まれた外来語でもアクセントを置くということがわかっている。つまり、日本語では音の高低によって英語の強さアクセントを実現しようとしているというのがわかる。((4) 参照)

(4)	英語	日本語
	condition	kon. di .syon
	sentence	sen .ten.su

日本語に取り込まれる英語由来の外来語をみると、日本語に特有の平板型と呼ばれるアクセントは表れず、取り込んだ外来語のどこかにアクセントを置く傾向が強いことが分かる。言い換えるとこれは、原語である英語のアクセントを反映させようとしている日本語の姿がみえる。

II 日本語における外来語アクセントの変化

I 章では日本語の中の外来語がアクセントという視点から観察すると和語や漢語とは異なることをみた。ここでは、現在の日本語における外来語のアクセント変化の現象を取り上げ、その変化の要因について調べた研究を報告する。

1 変化している外来語——なぜ変化したのか？

日本語の中で外来語が和語とは異なるアクセント型の振舞いをみてきたが、この特異な外来語のアクセントには実は規則が存在する。それは [McCawley 1978] による日本語の「外来語のアクセント規則」である。この規則は「(語を) 後ろから数えて 3 モーラ目を含む音節にアクセントを置く」というものである。この規則は一般性が高く多くの外来語に

あてはまる。(5) にはその例を示す。

(5) ストレス、ハワイ、ワシントン³

しかしながら、この外来語のアクセント規則に従わない例もある。(6) はアクセントの位置が語末から3モーラ目ではなく4モーラ目、あるいは5モーラ目にあることが許容されている外来語の一例を示す。

(6) ミュージシャン、アレルギー、エンデバー

(6) に取り上げた外来語の特徴として語末に -LH#⁴ という音節構造を持つことである。語末に「タ・タン」、「タ・ター」というリズムをもつような外来語である。(7) には (6) の語彙に対応する音節構造を示す。

(7)	ミュー・ジ・シャン	(H.L.H#)
	ア・レ・ル・ギー	(L.L.L.H#)
	エン・デ・バー	(H.L.H#)

先述の通り、これらの外来語の傾向として、アクセントが語末から3モーラ目ではなく4モーラ目、あるいは5モーラ目に置かれることが指摘されている [Katayama 1998]。この4モーラ目あるいは5モーラ目にアクセントが置かれるようになった要因について [窪 蘭 1999] は英語学習によりラテン語アクセント規則を習得し、それを適用しているのではないかと推測している。このラテン語アクセント規則とは「語末から数えて2音節目に重音節 (H) があれば、そこにアクセントを置く。そうでなければ (つまり軽音節 (L) だけならば) それよりも一つ前にアクセントを置く」というものである。規則を文章で書くとわかりにくため、3音節語を考えて、このラテン語アクセント規則と先ほどの日本語の外来語規則をかけてみるとどうなるのかみてみよう。前者、ラテン語アクセント規則をかけ

3 (5) の例で「ワシントン」の語末から3モーラ目の「ン」にアクセントが置かれないのはその「ン」の前に位置している「シ」とともに「シン」という1音節を形成するからである。

4 L(Light Syllable): 軽音節 (日本語の長音 (ー)、撥音 (ン)、促音 (ッ) を除いた一文字、あるいは一拍に相当)。

H(Heavy Syllable): 重音節 (日本語の長音 (ー)、撥音 (ン)、促音 (ッ) と軽音節をあわせたもの、あるいは二拍に相当)。

は音節境界を示す。

たものを (8)、後者、日本語の外来語アクセント規則をかけたものを (9) でみしてみる。

(8) ラテン語アクセント規則

- | | | | |
|---------|---------|---------|---------|
| a. LLL# | b. LHL# | c. HLL# | d. HHL# |
| e. LLH# | f. LHH# | g. HLH# | h. HHH# |

[窪藁 1999]

(9) 日本語の外来語アクセント規則

- | | | | |
|---------|---------|---------|---------|
| a. LLL# | b. LHL# | c. HLL# | d. HHL# |
| e. LLH# | f. LHH# | g. HLH# | h. HHH# |

[窪藁 1999]

軽音節 (L) と重音節 (H) の 3 音節語の組み合わせは 8 つある。(8) と (9) はそれぞれの規則を掛け合わせた結果、8 通りある中で 6 通りはどちらのアクセント規則をかけてもアクセントが置かれる位置は一緒であるが、(8e)、(8g) と (9e)、(9g) の 2 箇所は、それぞれのアクセント規則をかけるとアクセントの置かれる位置が異なることがわかる。この 2 箇所に共通するのは、先ほど延べた -LH# という音節構造をもつことである。つまり、この -LH# という音節構造においては、この二つの規則の間でアクセントがゆれをみせるということになる。

これまでこのアクセント変化を起こしている外来語の研究においては理論的な側面からアプローチは多くなされてきている。理論的アプローチでは、このアクセント変化について「話者の頭の中に二つの規則 (日本語の外来語アクセント規則とラテン語アクセント規則) が置き換わってしまっているのだ」ということを説明しようとしてきた。しかしながら、これまで「なぜ規則が置き換わらなくてはならないのか」という根本的な理由についての研究はなされてこなかった。この点を踏まえ、これらの変化しつつある外来語のアクセントの実態の把握、および、なぜ変化したのかという動機付けについて調査した研究を次にみしてみる。

2 アクセント変化の実態とその変化要因の検証

(1) 実在外来語を使った調査

まず先に述べた変化しつつある外来語のアクセントの実態をみよう。[竹村 2005] では [窪藁 1999] の観察に基づき、-LH# の音節構造をもつ実在外来語 (93 語) を用いて外来語アクセントの調査を行った。被験者は 10 代後半から 60 代までの東京方言話者 18

名である。この調査の結果、若年層は(-4型)のアクセントで発音する傾向が高いことが分かった⁵(図1参照)。

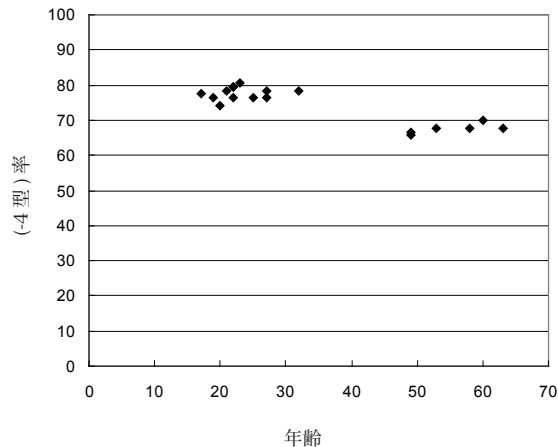


図1 -LH #実在外来語の(-4型)アクセントと年齢の相関図

具体的にどのように若年層がアクセントを置くのかを(10)で示す。

(10) 若年層(19-29歳12人)

高齢層(60歳以上6人)

ミュージシャン

ミュージシャン

アレルギー

アレルギー

エンデバー

エンデバー

しかしながら、[竹村 2005]では年齢という要因でのみしか調査を行っておらず、被験者の英語の習熟度は計っていないために(-4型)と英語の習熟度との関係は明らかにされていない。また調査で用いた外来語は実在外来語であるため、すでに許容されるアクセント型が決まっているという問題点があった。次にみる研究では、これまでの先行研究の不備な点を補強して調査を行い、[窪蘭 1999]の仮説の妥当性を検証するものである。

(2) 無意味語を用いた調査

この研究では-LH#という音節構造がもつ二種類のアクセント型をvariation(変異)として捉え、この二種類のアクセント型が出てきた動機付けを社会学言語学的な側面(年齢

5 有意水準は5%域で有意差あり。

や英語学習など) から追求することを目的としている。仮説としては、[窪蘭 1999] に基づき、英語の習熟度が高い人ほど、英語のアクセント規則に似た (-4 型) が多くなるであろうと考えた。この仮説を簡略的なグラフにすると図 2 に示すようになる。

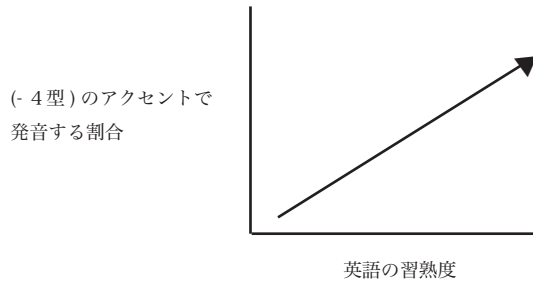


図 2 英語の習熟度と (-4 型) のアクセントで発音される割合の予測

図 2 に示されている通り、横軸で示されている英語の習熟度は右にいくほど英語の習熟度が高いことを示し、それに伴い (-4 型) のアクセントで読む割合が高くなるだろうという右肩上がりのグラフを予測した。

さらにこの研究では無意味語を用いて実験的な枠組みで調査を行った。[竹村 2005] で用いた実在外来語はすでに辞書に記載のあるアクセントがあるために、被験者は規範的な辞書記載のアクセント型を言う可能性がある。一方、無意味語を使用した実験の利点はどの被験者にとっても初めて目にする単語であるため、被験者のデフォルトのアクセント型つまり被験者がもっている外来語に対する無標のアクセントを引き出すことが可能になる点である。この研究では仮説の妥当性を確かめるため、実在外来語ではなく無意味語を用いて被験者のアクセント型を引き出すことにした。

① 被験者

被験者は関西圏 (主に神戸、大阪、京都、奈良) に在住の日本語母語話者 29 名 (男性 9 名、女性 20 名) である。どの地域の出身者も、その土地で生まれ育ったことを条件に被験者を選んだ。

	年齢範囲	男性	女性	合計
関西地域	19-39 歳	9 名	20 名	29 名

表 2 被験者の内訳

② 方法

この調査で最も重要な点は被験者の英語の習熟度と、その人がもっている外来語に対するデフォルトのアクセント型を調べることである。ここでは、それぞれの調べ方について述べる。前者の英語の習熟度を評価するには客観的な指標—例えば TOEIC や TOEFL など—が妥当であろう。しかしながら、被験者全員にそのようなテストを受けてもらうのは現実的に無理がある。そこで次のような方法で被験者の英語の習熟度を調べた。

日本語に外来語として入ってきている語彙の中には、原語である英語のアクセントの位置とは異なるところにアクセントがあるものがある。例えば *suspense*、*accessory* などは外来語の「サスペンス」、「アクセサリー」としてそれぞれ日本語に入ってきているが、日本語で外来語として発音されるときアクセントの位置と英語で発音されるときアクセントの位置は異なる。例えば (11) のようにアクセントは異なる。

- (11) *suspense* [səspéns]、サスペンス
accessory [æksésəri]、アクセサリー

このような日本語に外来語として入ってきている語彙は日本語母語話者にとって英語を学ぶときにアクセントを間違えやすい単語として知られている。これらの英語で発音するときアクセントの位置を間違えやすい語彙を「英語のアクセントで言ってください」と指示して被験者に言ってもらう。表記は英語の綴りで、その上にルビとして外来語読みのカタカナ表記もつけた ((12) 参照)。

- (12) ^{ハンバーガー}
 hamburger

もし被験者が英語のアクセントを知っているのならば、正しい英語のアクセント位置で発音するが、もし知らない場合は日本語の中で使われている外来語のアクセントを発音するだろうと考えた。つまり (12) の例では、正しい英語のアクセント位置であるならば *hamburger* [hæmbə:gə] となり、「ハン」にアクセントが置かれるはずである。もし「バー」にアクセントを置いて発音したとすると、この被験者は英語のアクセント位置を知らないという判断とした。このように日本語と英語とでアクセントが異なる単語を 65 単語用意し、英語の正しいアクセント位置で発音された場合には点数を与えて得点化した。

調査として用いた調査語彙は無意味語、実在外来語、和語の 3 種類、全部で 180 語である。その内訳を表 3 に示す。

音節構造	#LLH#	#HLH#	#LLLH#	#LHH#	#LLHH#	実在外来語	和語	合計
語例	タムラン ルマムー ドロリン ルルドン	ルンゲピー ラットミン ペーマドー ラーチュロン	パデピレー クレネノン カテフキー パラクチョン	スランキー ミローナン	ルモランソン グミノンラー	バッテリー セレモニー ビタミン	あさがお 水遊び	
数	42	42	42	5	9	28	12	180

表3 調査語彙の内訳

具体的にどのようなアクセントが現れてくるのか、(13)で見てみよう。(13)には表3にあるような無意味語を4つ挙げた。

- (13) a. パデピレー (pa.de.pi.ree)
b. クレネノン (ku.re.ne.non)
c. ルマムー (ru.ma.muu)
d. ルルドン (ru.ru.don)

(14)、(15)には(13)で示した無意味語が後ろから3モーラ目と4モーラ目にアクセントが置かれたときの例を示す。

- (14) 後ろから3モーラ目
a. パデピレー (pa.de.**pi**.ree)
b. クレネノン (ku.re.**ne**.non)
c. ルマムー (ru.**ma**.muu)
d. ルルドン (ru.**ru**.don)

- (15) 後ろから4モーラ目
a. パデピレー (pa.**de**.pi.ree)
b. クレネノン (ku.**re**.ne.non)
c. ルマムー (**ru**.ma.muu)
d. ルルドン (**ru**.ru.don)

これらの調査語彙を使って被験者に一つの単語につき2回ずつ読み上げてもらった。1回目と2回目のアクセントが異なった場合には、もう一度2回ずつ、被験者が1回目と2回目のアクセントが一致するように読み上げてもらった。被験者の発音を録音し、各被験者のアクセントの位置を単語ごとに記録した。

(3) 無意味語調査の結果と分析

図3はこの関西圏における調査結果を示したものである。横軸には65語の英単語を読み上げたときの得点、縦軸には各被験者の(-4型)率を表している。この調査の結果、LLH#という音節構造においてのみ、英語アクセントの得点率と(-4型)率との間に相関関係が確認された($r = 0.369$, $p < .05$)。

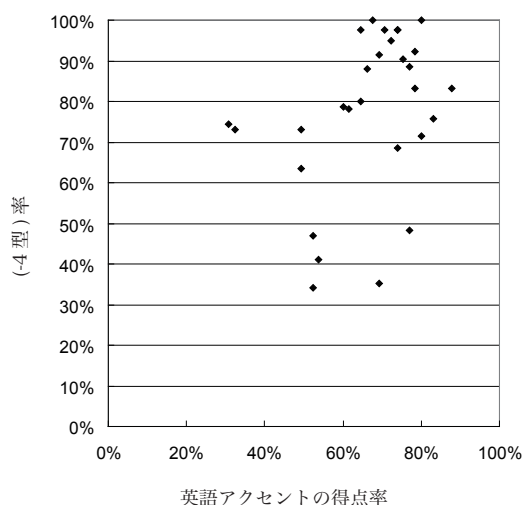


図3 英語アクセントの得点率と(-4型)率

年齢を統制することにより英語のアクセントの得点率と無意味語を(-4型)のアクセントで読む割合との間には相関があることが分かる。この結果からは、英語学習の影響によって擬似外来語である無意味語が(-4型)のアクセントで発音されているとは直接的にはいえないが、この二者間には何らかの関係があることが示されている。

これまで理論的なアプローチでは、外来語のアクセント変化を「規則の置き換え」として扱い、その置き換えが起こった要因については見過ごされてきた。ここでは置き換えが起こった動機付けを言語外的要因に求め、その検証を行った。その結果、間接的にはあるが外来語アクセント変化の動機付けには英語学習という言語外的要因が何らかの形で関与することがわかった。

III まとめ

この報告では外来語を言語学視点から眺めた。第I章では日本語における語彙層別のア

クセントの振舞いについてみてみた。外来語には日本語に特有のアクセント「平板式」が現れず、アクセントが現れる「起伏式」が多いことを確認した。

第Ⅱ章では変化している外来語アクセントを取り上げ、そのアクセントの実態と変化の要因について調べた研究を紹介した。これまでこの -LH# という音節構造をもった外来語アクセントの研究は数多くなされてきた。その中でもとりわけ理論的枠組みでの研究が多く、この特定の音節構造において日本語における外来語のアクセント型がどのようにして二種類現れるのかをその理論的枠組みの中のみで説明しようとするものであった。

この研究ではこの二種類の外来語アクセントを変異として捉え、その二種類のアクセントが許容されるようになった動機付けを探ることを目的に調査を行った。動機付けの要因として挙げられていたのは、英語学習によりラテン語アクセント規則の習得し、それを日本語の外来語アクセント規則が予測するアクセント位置とは異なるところで、過剰にラテン語アクセント規則を適用するのではないかというものであった。

調査では英語のアクセントの習熟度を調べ、擬似外来語である無意味語を用いてのどこにアクセントを置いて読むかという二点を調べた。その結果、英語のアクセントの習熟度と無意味語を (-4 型) で読むことの二者間には相関があることがわかった。この傾向はとりわけ 4 モーラで構成された、LLH# という音節構造をもつ無意味語において特に顕著な傾向であった。

この研究で残された問題は二点ある。一つは被験者の数を増やして年齢を統制した大規模な調査をしなければならないこと。そしてもう一点は外来語のアクセントが本当に変化しているかどうかについて追跡調査が必要であるという点である。今回と同様の実験調査を 10 年、あるいは 20 年後に年代別に行った場合、高齢層において (-3 型) が現れず (-4 型) が多く観察されたとすれば、外来語の特定の音節構造においてアクセントに変化が起きたと言えるであろう。

言語変化のメカニズムには言語内的な要因と言語外的な要因がある。今回のアクセント変化には音節構造という言語内的要因も関わっていたが、変化の動機付けとなったのは言語外的な要因——今回は英語学習という要因——がその一つであったと考えられる。言語変化の現象を捉える際、言語内的要因ばかりに注目しがちであるが、言語外的要因も考慮し精査することにより、言語変化の全体的なメカニズムの解明につながるであろう。

参考文献

- Katayama, M. 1998, Optimality Theory and Japanese Loanword Phonology. Doctoral dissertation, University of California, Santa Cruz.
- Lehiste, I. 1970, *Suprasegmentals*. Cambridge, Mass.
- McCawley, J. D. 1978, "What Is a Tone Language?" In: Fromkin, V. (ed.). *Tone: A Linguistic Survey*, 113-131. New York.
- Pike, K. L. 1948, *Tone Languages*. Ann Arbor.
- 窪蘭晴夫 1999『日本語の音声』岩波書店.
- 窪蘭晴夫 2006『アクセントの法則』岩波書店.
- 柴田武 1994「外来語におけるアクセント核の位置」佐藤喜代治編『現代語・方言の研究』明治書院.
- 竹村亜紀子 2005「世代間によるアクセント分布の相違と原語の影響について」. 第131回言語学会予稿集, 日本言語学会 234-239.
- 竹村亜紀子 2007 Loanword Accent Change in Japanese. Master's thesis. Kobe University.

(神戸大学大学院人文学研究科)